

三里山を取りまく

泰澄開創社寺について(上)

池田 正男

1 はじめに

福井県内では昨今、平泉寺、豊原寺、白山禅定道あるいは大谷寺などの発掘成果がある一方、並行して泰澄に関する研究が進展し、ホットなテーマとなっている。こうした中で大滝寺を中心とする取り組みが取り残されている観がある。非力を省みず、この点について取り組んでみたいと思う。

2 課題の設定

福井県寺院台帳や福井県神社台帳の由緒から泰澄開創あるいはその弟子を開基とする寺院を抽出してみると、密度が高い地域は大谷寺を中心とする丹生山地界隈である。次いで目に付くのは大滝寺に近い位置にある独立丘陵・三里山を取りまく地域である。(図1)

大谷寺関係は他にお願ひすることとし、三里山を取りまく泰澄開創社寺についてメスを入

池田 三里山を取りまく泰澄開創社寺について(上)

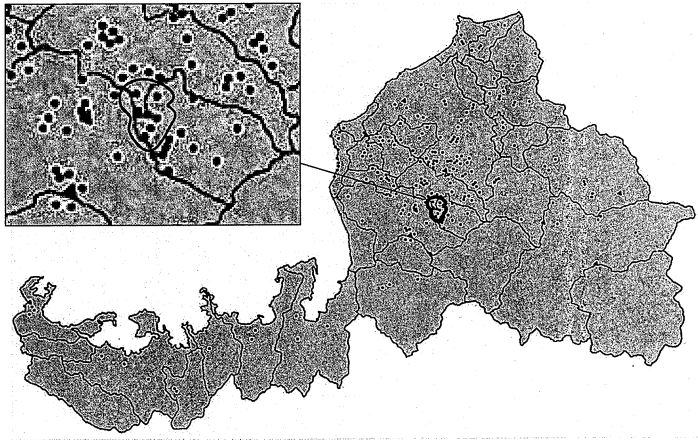


図1

れてみたいと思う。

当独立丘陵の外周はおよそ三里あることにより山全体の呼称を三里山とするが、行司ヶ嶽と記す文献もある。当稿では混乱を避けるため、山全体の呼称を三里山とし、東南端のコーンデ形の峰を行司ヶ嶽と記すこととする。

3 三里山を取りまく泰澄開創社寺

3・1 放光寺(越前市中新庄町)

近世において大滝寺の三十三年御開帳や千五十年大祭礼の法華八講では天台律宗(真盛派)の武生引接寺が講師、中新庄放光寺が副講師を勤めている。こうした大瀧寺の祭事を司る権益はどのように獲得し得たのであるうか。この謎を解き明かしてみたいと思う。

『天保十五年御開帳記録留』や『慶応二年一千百五十歳御神忌大祭礼二付 法華八講記』²⁾によれば、前述の両寺は手厚く遇され、且つ大滝の法徳院(寺とも)は既に放光寺末(真盛派)に転じているが、両寺の出張所的立場にあることがみて取れる。こうした権益の発生起源は古代中世にまで遡るものと考え

る。まず放光寺の経歴を探ってみたいと思う。由緒をみておく。

放光寺 今立郡北新庄村中新庄

本寺院ハ養老元丁巳年泰澄大師ノ開基ニシテ中古ノ興廢不詳ナレドモ明応三甲寅年ノ春円戒国師真盛上人ガ中興セラレタリ此ノ時ヨリ西教寺末トナリ今日ニ及ブ、本寺院

八西教寺法流二属シ智禅院高源山ト称ス
養老元年泰澄開基、中興開基眞盛、明応三年
改宗となつてゐる。寺号については触れてい
ない。ところが『絵仏裏書控』⁴には

奉寄進五五菩薩像 二幅

施主大瀧寺住栄祐大徳

右依厚縁新庄之宝樹寺九代住善久西堂

己卯八月十五日ト計リ有リ 判有リ

右二幅共二同ジ文談御座候御事

三尊仏ノ裏書写

奉寄進阿弥陀如来尊像

金若筆跡并廿五菩薩像二幅

右依不思議宿善雖感得持受之、為結往生

極樂善縁、新庄宝樹寺寄進処也

天正三乙亥年十二月八日

施主大瀧寺住呂栄祐

第五代住持眞兼大法師

右絵像ノ裏書如此御座候、以上

三田村御氏

天正三年に大瀧寺住持が三田村氏に仏画幅
を贈つた。ところがその仏画幅は元来、新庄
の宝樹寺所蔵であり、その仏画幅の裏書によ
れば宝樹寺善久が己卯年八月十五日に大瀧寺

に寄贈したという。己卯年は天正三年以前の
己卯年であり、最も遅くみても永正十六年で
ある。また『申伝書』⁵には

先祖相州鎌倉山崎之由中此近江山崎之城

二居住ノ由其後山崎肥前守越前新庄二居

住天台律宗宝樹寺二石塔等于今有之由申

伝居館之跡毛有之由伝新庄ニテ三千三百

貫致領知弘治三年死去之由当時宝樹寺ヲ

放光寺ト改ル由之

とあつて、弘治三年頃に寺号を宝樹寺から放

光寺に改めたという。初期越前藩の古跡寺院

の登録台帳ともいわれる『越前国寺庵』⁶には

天台律宗

新庄 宝樹寺 放光寺

と二つの寺号が併記されている。よつて寛永

元年から延宝年間までの間の改号は確かなの

うである。

放光寺由緒が記すように天台律宗（眞盛

派）への転宗が明応三年なので転宗後も宝樹

寺の寺号を用いていたことになる。そして転

宗二十五年後の己卯年（永正十六年）でも住

職は九世善休西堂を称し、大瀧寺と良好な関

係を有していたとみられる。ただし己卯年が

長祿三年及びそれ以前だとすれば改宗三十五
年以上前のこととなる可能性もある。ともあ
れ絵像の寄進があつた永正十六年に宝樹寺の
住持は九代であるから1代を10年または20年
とみれば初代は90〜180年前ということにな
り、宝樹寺開創は早くて1340年頃の南北
朝期ということになる。いずれにしても泰
澄開創を勘案すれば古代末か中世始め頃に一
時廃絶し、その後再興されたのではないかと
考えられる。

以上みてきたように放光寺の元の寺号は宝
樹寺であり、泰澄開創の由緒は宝樹寺に伝わ
つたものであろう。

さて目先を転じてみる。『越前志』⁷によれ
ば

児権現 大瀧村二有、養老年中ノ造宮也。

此社ノ山ハ同村三田村周防持山なり。三田

村ハ光嚴院ノ御宇足利將軍へ始て御教書紙

を調進せしより將軍家の御用紙ヲ奉り候

御目見え列ニ加レリ縁起別巻ニ委し三田村

二下(中略)此宮古ハ中新庄村ニアリシ由今

跡に石槲アルト云。其處ノ名ヲハニウト云。

大瀧ト云名モ有之由

とあり、先に挙げた絵仏幅の寄進先であった三田村家は大瀧寺四十八坊の一つとも伝えられ、道西掃部を祖とし紙漉きの祖との傳承を有し、近世には五箇の御紙屋の元締めでもあった。そして近世後期の口碑では、中新庄の地は大瀧寺の原初の地であるとの傳承が残っていたという。大瀧児権現が元は中新庄村にあったとの傳承を追求してみたい。『今立郡誌』にも

権現跡

北新庄村中新庄の東、行司嶽の半腹にあり。今尚一株の老杉ありて其下に方五間程の社跡あり。往古稚子権現を奉祀せるに一夜大風雷老杉の梢端を折り、神体と共に飛んで岡本村大瀧の山頂に至り、大瀧稚子権現として祀らるるに至れりと伝ふ。

とあって、別伝を載せている。また「放光寺は大瀧寺の鍵取りであった」との大瀧に残る傳承とか、「放光寺の支院が三里山周辺を取りまくように存在する」事実からも、放光寺の大瀧寺や三里山とのただならぬ関係がみとれる。少々長文であるが、『児権現縁起』¹⁰を確認しておきたい。

池田 三里山を取りまく泰澄開創社について(上)

大瀧児大権現本地十一面観音

抑当社由来は忝も人王四十四代元正天皇御宇養老三己未年越大徳泰澄大師近郷戸谷村之河辺にて十七日の御修法之折節、辰巳に当て毎朝紫雲タナヒキ時奇異の思ひをなし給ひ、満座におよひて尋人給へハ、一村あり、清淨の瀧流れて心耳をすますゆえに、村の名を大瀧と改給ふ、是今の御手洗川の水上なり、即寅卯に当て大山あり、唐土経山寺に似たりとて仰ぎ給へハ、前年開關之白山目のあたりに見へ給ふ、大師稽首再拝し給ひ、当山靈地成けれハ、権現御影向在座せと三密印觀を疑し、五相身心を調て、折念加持し給ひけれハ、白玉飛來る、大師独鉢を以て受給ひ、是全本地の真身にあらしとて兜遍巧を増給へハ、児重顯れ出給ひ、(中略)帰命頂礼して靈感を仰ぎ、石櫃二納、大徳山本宮の下に生奉利七ヶ日護摩を修行(中略)胎藏金剛乃二部を圖し、七堂伽藍を建立し給ふ、大瀧児大権現と本宮に崇め奉利、御前立には川上御前、越南知には大杉を祭り、別山には梅咀麗那仏、撰社には文殊蔵王虚空蔵弁財天、八幡

宮護摩堂にハ不動毘沙門、講堂には釈迦其外多の神を納給ふ(後略)

『郷土史往来』¹¹では

放光寺並に大瀧寺縁起伝説によれば、養老三年に白山の修行を終えた泰澄が、三里山の南西、今の中新庄高源山に草堂を結んで修法し、毎日山を下りて戸谷の高座橋付近の川原に於て説教していたが、ある日高源山から石を投じて落ちた地点に寺を建てたのが放光寺だといわれている。その時、東南の方に紫雲たなびくを見て不思議に感じ、尋ね行つたところが大瀧児権現の縁起だと伝えられている。

とあって、『郷土史往来』は縁起に傳承を加味して加筆しているようであるが、概ね妥当のように思う。では何故、泰澄は中新庄の修行地と戸谷の修法地を往復していたのかを考察しておきたい。戸谷の修法地は府中へ向かう陸上交通路と浅水川の内水運の交点にあたることに着目する。つまり山間修行地と布施を受ける地とを往復し、地元有力者からの支援を受けて大瀧の地に拠点を設けたということになったのではあるまいか。なお後年、真

盛が説法を行ったとの伝承地「高座橋」は泰澄の戸谷修法地と一致していると考えられている。

なお『武生町地図』¹²によれば主往還は粟田部から戸谷・高座橋・今市(塚町北部)・馬上免を経て稻寄南部の日野川東岸に至り、ほぼ東西を直線的に形成されている。

また現在、鞍谷川は三里山を東流しているが等高線は金屋町辺りで凹曲しており、西流するのが自然であるように思える。中新庄では「蔵谷川の通称ガンドと呼ばれた蛇行箇所(粟田部地籍)の堤防が切れると床上浸水になった。」と記している。なお「味真野川も亦、北新庄村西極尾より粟田部を経て、鞍谷川と合し、行司ヶ嶽東麓を繞りしが、文安年中河身を改修して西麓を繞らしめしとの伝説あり」と記している。¹⁴しかし三里山は独立丘陵であるので日野川の東流による土砂流入とのバランスにより、味真野川(浅水川)・鞍谷川は西流したり東流するものであり、恒久的に東流したとは言えない。よって鞍谷川は西流していたこともあったとみられ、戸谷辺りの浅水川水量はもっと多かつたはずであり、

内水運の拠点として無理が無いと考えている。先にも触れたが地理的に独立丘陵自体からの土砂供給能力は劣るため山麓外周一带には河川が集中し、特に排水側では沼化する。よって三里山山麓一带は内水運が盛んになる特徴を持っている点を指摘しておく。

地籍調査及びフィールド調査をしてみた。

高源寺跡 地籍では越前市中新庄町86字高源山(山地)は標高323mの高源山の西面を指す。同長尾町95字高源寺(山地)はその西山裾にあり、次項で記す長福寺跡に隣接する山頂側にある。高源山山頂より約500m北方の標高282mの山頂には広さ約3000平方メートルの開削平地があり(中新庄地籍80字大瀧、国中地籍71字壁谷、南中津山地籍69字峰ヶ谷の交点)、ここに高源山放光寺跡との棒示杭が立っている。ここが泰澄修法地との伝承地とみられる。この地点は南中津山谷と国中谷との間にある支尾根と三里山主尾根の交点でもあり、国中神との関係も想見される。この点は「5・2 三十八社について」の項で再び論じてみたい。

この開削平地の平面略図(図2)を挙げて

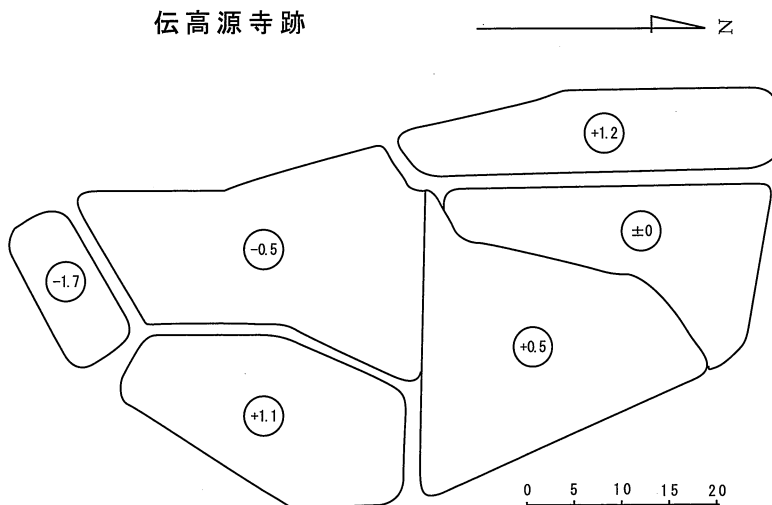


図2

おく。正西位になっている西の台と正東位になっている東の台は互い違いにずれて配置され、その間の平地は北側と南側で0.5mの段差があり、西の台と東の台からはそれぞれ約1mほど掘り下げられている。また北側の平地には傾斜のある微高地があり、あるいは基壇が崩れたものではないかとも考えられる。なお当開削平地近傍には堀切跡が見られないことから、中世の軍事施設ではないとみている。ただし後で詳述するが、この南方の高源山山頂には尾根筋を遮断する高源寺山城跡があり、この山の西方の支尾根にある椿坂は古戦場であり、砦跡も遺存している。よって当平地は中世に兵站基地などとして改造された可能性は否定できない。

稚子権現堂跡 『今立郡誌』の「権現跡」の記述では「方五間の社跡あり、稚子権現跡」と記している通り、標高283mの権現山山頂(中新庄80字大瀧の北隣79字権現山、鯖江市下新庄80字堂ノ奥、国中70字長尾の境界)には、南北約50m東西約35mほどの開削平地がある。この開削平地の平面略図(図3)を挙げておく。最も高い部分は直径13mほどの円形

台地で、その台地に斜めに突き当たるように幅7m長さ25mの長方形台地が築かれている。方位は高源寺跡を通して大瀧寺奥の院に向いている¹⁵。これは山岳修験場の長床と考えられる。その西方と南方には山頂部を中心に同心円状に僧坊跡とみられる開削平地が十数箇所みられる。特に下新庄と中新庄との境界支尾根を下る表参道は道幅が5m程もある。参道を山頂から50mほど下った時点からは山頂からみて西北方にある僧坊跡群へ向かう道が設けられ、一部には土塁跡とみられるものが長さ20mほど遺存している。もっと大きい僧坊跡は山頂から40mほど下がった地点に東西約20m南北約35mほどの広さを持つ。軍事施設ではない証左として堀切跡が一つも見当たらない点を挙げておく。

ここが稚子権現堂跡と考える論拠として、当地の地字を権現山と命名している点、およそ400m南方の高源寺跡と隣接している点、今立郡誌で伝承を伝えている点を挙げておきたい。

なお現在の権現堂跡地については、前述した高源寺跡より200m北方の尾根より中新庄側

池田 三里山を取りまく泰澄開創社寺について(上)

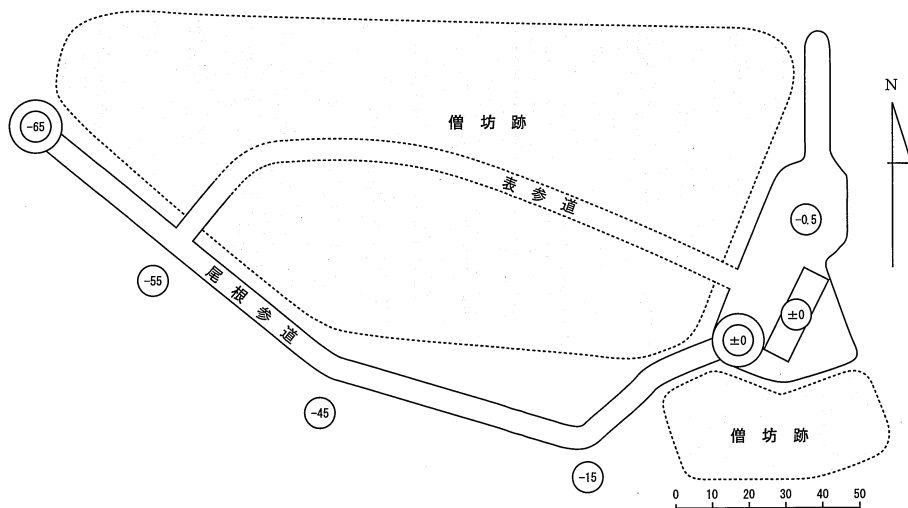


図3

に100 m程下ると権現堂跡がある。この案内板には

越の中山権現堂跡

当地ハ越ノ大徳泰澄大師開山ノ靈山ナリ靈水ヲ涌水ス。武生市在住ノ□□□□□ノ地
二昭和十二年稻荷堂翌年権現堂翌々年竜
神堂ヲ建立スル。(後略)

とある。敷地は東西約15 m南北約20 mであるが、あまりにも狭隘な場所であり、近世になつて開削された敷地であろうと考えられる。権現堂の伝承地が下新庄と中新庄との地境地であるため、中新庄としては差障りがあるため近世になつて別地に再建したのではないだろうか。

高源山祭祀跡 高源寺山山頂より西北方向に40 mほど下つた支尾根上(中新庄85字靈舎)

に約15 m四方の開削平地がある。その三隅には境界石を配したようにみえる。発掘調査を待たないと断定はできないが、祭祀遺跡と考えられる。ここが『越前志』に記す石櫛に該当するか、ハニウと呼ばれている地であるかどうかは不明である。

周辺の遺跡 なお当地近傍の遺跡について補

足しておく。朝倉氏が甲斐氏を決定的に打ち破つた新庄保の戦い(鴨宮の戦い)の戦場で著名な椿坂(別名猫坂)は浅水川が高源山(標高323 m)から西方に張り出した支尾根の山麓の肌を削っているため、朝倉西街道(別称塩売街道)¹⁸は小高く張り出した山麓を越えて往来している。この椿坂の南麓に長福寺地籍があり、山麓を開削した平地が残されている。(長福寺については次項に記す)椿坂より山頂に向かう支尾根上にはおよそ1 kmほどの間に古墳がおよそ100基ほどもある大古墳群¹⁹である。椿坂より300 m上方には古墳群中に上方と下方とに二段の堀切を有した郭跡が約250 m間に連続して構築されている。恐らく椿坂を監視する砦跡であつたろうと考えられる。高

源山山頂には堀切を南方と北方それぞれに二段の堀切を設け、三里山尾根筋を遮断する目的で構築されたとみられる高源寺山城がある。越前城跡考には記載が無い。連郭式構造であり、山頂より西方に30 mほど下つた地点には上方と下方とに堀切を持つ南北13 m東南20 mほどの最西方の郭跡がある。なお前述の祭祀跡はこの西方にある。さらに前述の古墳

群から高源山山頂に向かう急斜面の懸かり端にも五段の郭跡がみられる。よつて当地近傍は戦略上重要な地点であつたことが伺える。次に文化財面からアプローチしてみたいと思う。

放光寺 放光寺の寺仏を確認しておきたい。

『鯖江藩寺社改牒』の中新庄には

- 一 本尊 観音 長巻尺五寸 聖徳太子作
- 阿弥陀 同三尺五寸、勢至 同巻尺五寸
- 他 二阿弥陀仏 長巻尺五寸

とあるが、学童疎開への提供時に火災に遭い、二尺五寸の阿弥陀立像(平安末期)鎌倉初期作²⁰が現存するのみである。『寺社改牒』と食い違っているが、古伝を証するに値するようだ。

賀茂神社(中新庄町) 放光寺は賀茂神社の別当であつたとの伝承もあり、高源寺の鎮守であつたろうと考えられる。

『鯖江藩寺社改牒』の中新庄には

- 一 賀茂大明神惣社 三津屋村長尾村戸谷村
- 宮守□左衛門
- 神鉢 不動長七寸、弥陀一尺七寸、毘沙門同七寸
- 社 五尺四面、

さらに『賀茂神社文書』²¹によれば

第三十一区今立郡中新庄村

一 賀茂大明神壹社 御長六寸

神鉢奥ノ院木像 前々より四ヶ村惣

社御座候

一 阿弥陀木佛立像

是ハ去ル未三月 妙順寺へ御移り

一 不動明王毘沙門天王

是ハ去ル未三月 放光寺へ御移り

右之通改メ指上申候猶又去ル明治元辰年

ニ大虫村神主改メ役ニ御廻リノ節も御改

有之候通り賀茂大明神惣社元中新庄村三

ツ屋村戸谷村長尾村四ヶ村調印ニ而指上

申置候処少モ相違無御座候 以上

明治二年 越前国今立郡中新庄村

とある。当社は別雷命を祀っているが、京都

上賀茂神社の本地仏聖観音、釈迦は祭られて

いない。そして本尊の尺七寸の木造阿弥陀立

像は明治になって妙順寺へ移され、七寸の不

動と毘沙門は放光寺に移されたという。また

奥ノ院に高さ六寸の木像があると記されてい

るが現存していないようだ。しかし古記にな

い高さ38 cmの木造地藏立像が現存している。

これは愛宕系修験道の勝軍地藏信仰の所産とも考えられる。また不動妙王は越智山室堂の本尊（地主神）であるし、また俱利伽羅系修験道の不動信仰の所産でもあるらしい。大瀧寺の八幡宮護摩堂には不動・毘沙門が祀られており、地藏共々修験道に関わる遺物であることを指摘しておきたい。勿論、中世以前の修験道と近世のその所産であるかを厳密に峻別しなければならぬが、仮に中世以前のも

のがあれば、その諸仏は白山修験に関わる遺物と考えられよう。なおこの宮は椿坂より北西方向に浅水川を挟んで約1 km離れた直径約500 mほどの円形小独立丘陵の上に設置され、

宮の背後には50 m級の倍塚を伴う前方後円墳

一基と20～30 m級の円墳二基がある。参考ま

でに付記しておく。

薬師堂（鯖江市下新庄町）『郷土史下新庄』²³

によれば、下新庄奥出の小丘上には薬師堂が

あり、もとは三里山中腹より近世に現在地に

遷されたものと伝えられている。ここには丈

六の平安期作の木造薬師坐像が安置されてい

る。他に平安末期作木造如来型坐像、鎌倉末

期作木造男神立像、平安後期作木造天部形像

頭部残欠、制作年代不明の木造天部形立像残

欠、鎌倉後期作三面石仏（正面如来形坐像、

右面菩薩形坐像、左面菩薩形坐像、堂の奥出

土）と古仏が大量に残されている（以上、西

川新次氏鑑定）。そして三面石仏は下新庄80

字堂の奥から出土したものとあり、将に稚子

権現堂跡のある地籍である。これらが稚子権

現堂の遺物であれば高源寺の活動期の事績が

更に明確になるとも考えられる。

以上みてきたように伝承では大瀧寺の元地

であったとし、遺跡でも大瀧寺と深い関わり

を持つことが認められる。よって近世になっ

ても放光寺は大瀧寺の原初の寺との榮譽を大

瀧寺側が認めていたのであろうと考えられ

る。

まとめ

①放光寺の前寺号は宝樹寺であること。そし

て寺号変更は近世初期であったとみられるこ

と。

②絵像の寄進があった永正十六年¹⁵¹⁹に宝樹寺の

住持は九代であるから初代はその時より90

180年前とみると、宝樹寺開創は早くて1340年

頃の南北朝期ということになる。よって泰

田

池田 三里山を取りまく泰澄開創社寺について（上）

澄開創を勘案すれば古代末期ごろに一時廢絶し、その後再興されたようだ。

③天台律宗への改宗は泰澄開創伝承を持つ寺院に多いことや泰澄活動伝承地を布教活動に用いるなど、泰澄事績を布教活動に用いていた傾向が伺えること。

④高源寺跡及び稚子権現堂は山岳修験道の遺跡であり、権現堂の修験場の長床が大瀧寺方位をとっていることから、大瀧寺とリンクする施設であると考えられる。

⑤放光寺（前宝樹寺）は大瀧寺の原初の寺との榮譽を受けていたとみられること。また引接寺は放光寺の本山位にあることのみならず、積極的に泰澄開創の由緒を持つ寺院に改宗を誘ったことも、大瀧寺から優遇された遠因であったと考えられる。

寺号管理について 余談ながら寺号管理の問題に触れておきたい。宝樹寺の寺号について

『越前国寺庵』²⁴には

天台律宗

新庄 宝樹寺 放光寺

米ノ浦 宝樹寺

曾万布 宝樹寺

と宝樹寺を名乗る寺が三ヶ寺あり、いずれもが天台律宗の寺院である。何かの意図が働いていることは否めない。この問題を探ってみたい。

① 宝樹寺 丹生郡城崎村米ノ²⁵

本寺院ハ神護慶雲三年泰澄大師ノ開基ニシテ金池院ト称シ大師自作ノ不動尊ヲ安置シ本尊トナシ居リシモ降テ明応二年真盛上人越前御化導ノ際本寺ニ錫ヲ留メラル事須更ナリ時ノ住僧希山無曇和尚深ク国師ノ徳ヲ慕ヒ遂ニ弟子トナル国師是ヲ嘉シ真筆名号本尊寺号等を賜ハル(後略)

② 宝樹寺 吉田郡岡保村曾万布²⁶

越前国主朝倉貞景公篤ク国師ヲ崇敬シ玉ヒ延徳元年地ヲ治郎丸ニトシテ七堂伽藍ヲ建立シ玉フ国師太守ノ請ニ依リ此処ヲ永ク不断念仏ノ道場ト定メテ汎ク当国ヲ行化シ玉フ長享二年修行説化ノ道場ニトテ一字ヲ創設シ寺号ヲ宝樹寺ト称シ玉フ。(後略)

米ノ浦宝樹寺については山田秋甫²⁷は太閤検地帳や山論証文を論拠として寛永二十年以降

に現寺号に改めた、と記している。

筆者も米の浦宝樹寺の山号が放光山である点に疑問を抱いている。

曾万布宝樹寺は長享二年に修道説化の道場として建立されたが、元龜二年兵禍のため焼失し、元和五年1519再建されたことからみて、宝樹寺の寺号改号は再建以降の公算が強い。

また放光寺は前出の『申伝書』によれば、弘治三年1557頃に宝樹寺を放光寺に改めたとあるから、弘治年以降に放光寺に改号してから、余剰となった宝樹寺の寺号を振り当てたのが真相で無いだろうか。

北村高源寺について さらに高源寺の寺号についてもみておきたい。

高源寺の由来²⁸

一 北村下総守光勝公天正二年織田信長北国平拘ノ砌北村家滅亡シ室尼トナリ館跡ニ一字ヲ建立シ高源寺ト号ス

一 御除地 境内地 東西三十八間 南北三十二間

外二田四百歩余

境内ノ東二田六十歩余有り

右御除地ノ分ハ太閤檢地ヨリ除地ナリ

『越前国寺庵』²⁹では

北村 高源寺

寛政二年正源寺と改号

とあって、朝倉家臣北村光勝の内室が朝倉氏、北村氏滅亡後に北村城の故地に敷地を給わり、天台真盛宗高源寺を開創したという。

高源山、高源寺は前述の通り、放光寺の前身とも考えられ、放光寺の山号として用いられている。前述の通り宝樹寺の寺号でみてきたように近世に入ってから寺号は本山引接寺が管理していたようである。この高源寺についても放光寺の前身とも云うべき寺号であったようであり、真盛宗本山引接寺が管理し、北村氏の内室に与えられたものと推察する。

この寺号管理のテーマは後日別途稿を改めて論じてみたいと思う。

なおこの稿を終えた後、勝山市主催白山文化フォーラム2006で久保智康氏の『古代山林寺院越前と信濃の比較』³⁰の講演があり、初期山林寺院の立地（里の山の信仰空間）として①平野からさほど遠くない山間地で、平野から少し隠れた位置②主要交通路に沿う③

平野から望める特定の山④平地寺院との有意なつながり、の四項を挙げている。当権現堂は将にこの条件に合致すると考えられる。その他多くを学ばせて頂いたが、当稿に反映できなかった。

- 1 2005シンポジウム 山と地域文化を考える レジメ越前町教育委員会 堀大介氏の許諾を得て転載する。
- 2 越前市今立図書館所蔵 大瀧神社文書
- 3 今立郡寺院台帳 福井県立図書館蔵本
- 4 岡本村史史料編 大瀧神社文書 p.17
- 5 郷土とともに 中新庄壮年会 p.38
- 6 越前若狭地誌叢書 下 p.406
- 7 越前志 坂野二蔵著 寛政12年頃編纂 高橋亮三氏所蔵本影写本 福井大学付属図書館所蔵
- 8 現存する大瀧寺文書については昭和八年発行の『越前若狭古文書選』によれば「旧大瀧権現関係文書の主要なものは之を分離して大瀧神社に納入した。」と記し、元は三田村家に伝来したものであった。しかし残念ながら大瀧寺と三田村家の関係については『岡本村史』や『今立町誌』は触れていない。先に取り上げた「絵仏裏書控」は将に大瀧寺より三田村家に贈呈された事例そのものである。しかしこの事例だけではその関係は読み取れず、今後の課題としたい。

- 9 越前国今立郡誌 第六編名所旧跡及神社仏閣第二章旧跡 p.209
- 10 岡本村史史料編 大瀧神社文書 p.26
- 11 郷土史往来 栗塚勝治編 p.103
- 12 福井近傍之図 歩兵第七連隊 明治二十二年 武生町二万分之一 最も古い実測地図と考えられる。
- 13 郷土とともに p.73
- 14 越前国今立郡誌 第四編産業及経済 第一章土地及地味 p.78
- 15 稚子権現堂跡からは白山の山頂部が少し見えるだけであり、白山の方位はN⁶⁴Eである。この長床の方位N¹²⁶Eは大瀧寺奥の院に合致する。よってこの長床は白山を意識していないようだ。また当地からの正南位は高源山の祭祀跡の所在地に合致する。むしろここでは高源山を意識しているのだろうか。なお当地からみて白山と大瀧寺はそれぞれ概ね夏至の日出、冬至の日出方位であることにも注意を払っておきたい。
- 16 当地一帯の地字は霊舎となっており、宗教的な遺跡の所在を暗示しているようだ。標高290m付近にあり、後述する高源山山城の最西端の郭跡の下側堀切の下方にある。結果石と思しき西北石と南西石間は5mあり、正西位をとっている。南西石と南東石間は10.5mであるが、南東石は20度ほど南にずれている。北東石は見当たらない。東面は山側の傾斜地であり、埋没した可能性が

池田 三里山を取りまく泰澄開創社について(上)

ある。参道幅は3 m程あり、上方と下方に通じている。高源山山城の造営時に祭祀跡が温存されたことからみて、あるいは山城は宗教集団によつて造営されたのかも知れない。

- 17 『越前志』では石槨と記している。棺は二重構造になつており、棺を内棺、槨は外棺であり外側の囲いを指している。またハニウとは埴生であろうから土器等の材料となる赤土の取れる場所を言う。『神道大辞典』によれば住吉大社では「埴使い」と称し畝傍山山頂の特定の一所の霊所へ埴土を取りに行き、この土で祭器が作られると記している。あるいはここはそうした場所か。霊舎は霊社の転訛か。

- 18 歷程 新横江地区誌 平成十六年発行 p.117
- 19 椿坂古墳群の北隣の東山古墳群は30 m級円墳が5基、10 m級円墳が10基ほど整然と配置されているのに対し、椿坂古墳群は中小規模の古墳が一見無秩序に造成されている。当地の開発の過程を示唆していると考えられる。
- 20 鯖江藩神社改牒 鯖江藩政史研究会発行 p.84・85
- 21 神社改メ指上書 明治二年 賀茂神社蔵
- 22 郷土とともに p.66
- 23 郷土史下新庄 昭和六十年発行 p.86~95・p.113
- 24 越前若狭地誌叢書 下 松見文庫 越前国寺庵 p.406

- 25 丹生郡寺院台帳 福井県立図書館蔵
- 26 吉田郡寺院台帳 福井県立図書館蔵
- 27 城崎村志 山田秋甫著 p.238~240
- 28 松ヶ鼻用水沿革誌 昭和五十一年発行 北村沿草史 p.747
- 29 前掲24に同じ p.406~p.407
- 30 白山文化フォーラム2006 白山文化研究会主催「古代の山林寺院〜越前と美濃の比較から〜」講演レジメ 久保智康著

3・2 長福寺（越前市長尾町）

前項でも触れたが、文明三年八月二十四日鯖江上野と新庄保鴨宮で朝倉氏と甲斐氏が衝突し、朝倉氏は首級200余を挙げたという。越前市長尾町94字長福寺はこの戦いの場となる椿坂の南麓にある。伝承によれば長福寺はこの戦いで戦禍に遭い、廃寺になったと言う。またこの長福寺は泰澄の開創した寺院で大瀧寺草創十二坊の一つであったとも言う。長福寺の寺跡等を検討しておきたい。『南越温故集』²には

戸谷村瘧石（内容省略）
大円寺 開基唯元 後関泉寺ト号ス

大瀧安楽寺 尼
新庄 高源寺 放光寺
長福寺坂ト云。此寺越中へ引。アメゴゼノ坂トモ云。今ノ坂ハ間部家ノ領ニナリテ開クトゾ。大瀧権現小白山 十二坊ノ内ナリ。

とあり、前記の椿坂についての別称として長福寺坂とも称したと記し、長福寺は越中へ移転したと云う。富山の長福寺を調査したところ八ヶ寺の同寺名を検出したが該当する寺院は見つけられなかった。また長福寺は「大瀧権現の十二坊の内」と記されている。次回の稿で記述予定の戸谷大円山関泉寺の由緒では「大瀧稚児権現草創十二坊」と記されている。大瀧権現は四十八坊であるが、「十二坊」とは「草創十二坊」の意であり、長福寺は大瀧寺の草創時からの寺坊であった。ちなみに中新庄には現在長福寺がある。

長福寺 今立郡北新庄中新庄³
由緒 当寺上古ハ加賀国石川郡手取村ニ有之、人皇四十四代元正天皇養老三年泰澄和尚越後五智如来彫刻ノ為加賀国御通行際、手取川ノ南手取村ニ至リテ其地ノ

靈ナル事ヲ知り一字ヲ創建セラル、則チ長福寺是ナリ。後ニ天台宗ヲ伝テ僧侶跡ヲ継グ、今手取村ニ其旧跡現存セリ、(中略)第七世賢願ノ代ニ蓮如上人吉崎御教ノ際、祖師ノ御影御免ヲ蒙リ、又当寺へ御真筆ノ御書物ヲ頂戴シテ手取村ヨリ越前吉崎浦ニ転寺セリ、第拾世円誓ノ代ニ於テ同国足羽郡木田村ニ転寺シ第拾壹世教淳ノ代ニ同国今立郡中新庄村へ転寺ス、(後略)

とあるが、『石川県の地名』¹⁾によれば

手取村 美川町手取町

(前略) 中世に天台宗万福寺があり、中世末浄土真宗となつて万法寺と改称したがのちに越前国今立郡西鳥羽村に移転。

とあり、現長福寺は手取から吉崎、木田を経て中新庄に入ったというが美川町の伝承と合致しない部分もある。また元は天台宗万福寺で真宗に転じた後は万法寺に改称したという。ところが現長福寺は鳥羽の万法寺末であった。そして長福寺は道場であり寺号は明治になって取得した。また万法寺は泰澄開創の由緒を持っている。よつてどうも泰澄開基に

ついでには万法寺の由緒を流用したようだ。またこの寺(道場)は中新庄村に入ったのであり、長尾の長福寺跡に入ったのでは無いようだ。よつて移住してきた寺名が字地として残つたのでは無く、長福寺の地名は文明年間廃寺となつた寺のものであつたと考えられる。当遺跡及び周辺遺跡について記しておきたい。

長福寺跡 長福寺の地名については長尾94字長福寺と61字長福寺と二字が遺存している。

94字長福寺は山地となっているが、山裾に四段に段を切つた開削平地となっている。上段は正西方位に奥行20m幅40m程度、次段は2m下がつて奥行50m幅70m程度、さらに奥行35m幅50m、最下段は奥行25m幅50mとなつており、最下段の南側には東西方向に深さ2m長さ50m程度の掘割と見られる遺構が遺存している。北方の山裾にはテラスが切られる。当地に隣接する北西方向と南側にも広大な開削平地があり、長福寺の遺跡と伝えられている。当地の西方には樺坂に至る古道に面している。

高源山から北西方向に支尾根が張り出して

おり、浅水川がその張り出した支尾根を削つており、樺坂はその支尾根の崖地を越して通じている。長福寺跡はその支尾根の南麓にある。

なお地元では「放光寺は当初山頂付近にあつたが、次に字高源寺に移り、最後に現在地へ納まつた」との伝承がある。探索した結果、字長福寺の山側の隣接地となる95字高源寺以外には該当地は見当たらないことから、長福寺の草創に関わる伝承ではないだろうか。

白山神社

北新庄村長尾区 村社 白山神社⁵⁾

祭神 伊邪那美尊、菊理姫尊

由緒 不詳、明治26年(中略)第96号コカ山30番地より現在地に移転し、同時に境内神社薬師神社祭神菊理姫命由緒不詳の一社を合理せり。

口碑伝説 当区の東山林中に往昔高源寺と称せし古刹ありき該寺の始祖白山大権現を信仰し寺院創建の際傍らに社殿を造営し御分霊を奉し来りて奉鎮し崇敬祭祀したるに始まると云う。元と社殿は当社の所有たる長尾地籍95号字高源寺山16番

地在りしも該寺廢絶以來当社のみ遠く人家を距てたる山林中に残りて參詣者の不便少からざりければ其の後96号字コカ山30番地に移し更に明治26年現社地に奉遷せり而して現社地の傍ら地下の大岩に數個の穴あるは是れ旧時の大門にして昔し長尾景治居城の砌当社を信仰し奉納せる石鳥居の礎石なりと伝う

『享保六年丑歴書上明細帳』の長尾村には

一 氏神 式ヶ所

一 白山権現 但 宮九尺式間

此宮地式百五拾七歩 村除にて御座候

一 薬師 但 石堂壹尺五寸に式尺

此堂地七拾三歩 村除にて御座候

『寺社改牒』の長尾村には

一 氏神 白山宮 木造長一尺、九尺四

方、氏子持 社地百四拾四歩

とあり、筆者は元の白山社の所在地が長福寺跡の山頂側に隣接する位置であることからみて長福寺の鎮守だったのでは無いかと考えている。また薬師は後で合祀したものであるから、主神の伊邪那美尊は白山妙理権現本地仏の木造尺寸の十一面観音であつたらうか。残

念ながら本地仏と薬師は現存していない。薬師堂跡 前記及び伝承によれば長福寺遺跡の南方に隣接した位置にあつたといわれている。よつて長福寺の遺物であつたと考えられる。薬師を祀っていることから白山三所権現を祀る以前の信仰が三里山にも遺存したものと考えられる。

諏訪社（鯖江市下新庄）『越前志』によれば「古へ中新庄村ニ在荒神歟流サレ下新庄へ来リ玉フト云」とある。『名蹟考』には

高五百拾七石壹十六升七合 同 三ッ屋村

諏訪社 鑑取 □左衛門

とあつて、下新庄に諏訪社の記載が無い。そして『寺社改牒』の下新庄には

一 諏訪大明神 壹丈五尺四面 同断

三休 諏訪明神 長壹尺式寸五分

千手観音 長壹尺三寸四分

不動明王 長九寸七分

とある。『寺社改牒』の中新庄村の妙順寺¹⁰には

一 三津屋村にて寺屋敷除地壹ヶ所

前々より所持 是ハ先年当村民部山

と申山替地ニ仕支配仕来り候

とあつて、諏訪社を三ッ屋村が保持しきれずに下新庄村に移譲したものと考えられ、三ッ屋85字民部（山地）にあつたらしい。となればその地は長福寺より高源山の山側の山腹にあたる。ここに諏訪の本地仏（普賢菩薩か）と千手観音、不動明王が遺存していたようだ。なおこの地の近傍は中新庄と三ッ屋地籍が錯綜しており、誤つて中新庄から下新庄へ移つたとの誤伝になつたと考えられる。

周辺の遺跡 前項でも記したので重複を避けるが、当地の南方にあたる戸谷町には椿山出城と標高174mの堂山の山上には椿山城が存在する。この山城は『城跡考』に記載されており、粟田部街道を監視する目的で行司ヶ嶽城とあわせて朝倉氏によつて補強されたようである。そして高源山山城と椿坂砦ともリンクする軍事施設であつたと考えられる。長福寺は椿坂に隣接し、街道に面しており、掘割の遺構が存在するとなれば、椿坂砦とリンクした関所的な機能があつたのではないかと考えられる。

稚子権現堂 前項で記した山上の稚子権現堂について再考してみたい。前述のように山上

には長床の台地跡があることなどから山岳修験道のものであるが、中世にあっては恐らく平泉寺と同盟関係にある僧兵が盤踞していたと推察される。また山上の参道の広さからみて茶店等の存在も想見され、当時のにぎにぎしさも推察される。その参道は西方の新庄保に向かっていることから山下の長福寺とのリンクも想見される。そして長福寺は文明三年の新庄保の戦いで戦禍に遭ったと伝えられることから、この権現堂も同時期に衰退していたのではあるまいか。ただし『城跡考』¹²によれば、

城跡 柴田修理亮

中新庄村ヨリ東山下二東西四町南北五町計之所土居堀形有之。内大手口櫓台之形有。

とあって、土居堀をめぐらした方四町五町の広大な城跡であったという。何故この地にそのような城が必要であったのか。そしてこの城はまもなく廃城となったという。無論大集落新庄保の一向一揆を抑える意図もあるうが、権現堂を拠点とする勢力も視野に入っていたのではないだろうか。またこの参道が三

里山西麓に向けて付けられている点に付いて、戸谷の大円寺、長尾の長福寺、高源寺のいずれもが大瀧寺の支配下にあるのに対し、東麓山下の三十八社及び国中神社の支配地域は大瀧寺の神領でない点¹³を指摘しておきたい。

なお『寺社改牒』の東庄境村には

一 小宮不動明王 長式尺三寸五分作者不知
 壺間四面 同断但 寺号長福寺と申伝候

とあって当長福寺が退転した可能性も考えられよう。また『東寺修造料足奉加人数進状』¹⁵によれば長福寺は坂南郡本堂にもあった。参考までに付記しておく。

1 朝倉家録 富山県郷土史会 p.205

2 越前若狭地誌叢書 上 南越温故集 補記 p.587

ただし同書では「南越温故録」にあって「南越温故集」に無い記事を補記する。(庭本本による補記)と記すが、越前市中央図書館庭本文庫本には当記事は検出できなかった。前掲書の解題によれば、東大図書館蔵本がある。と記しており、後日確認したいと思う。なお戸谷から長福寺の記述に関して大瀧安楽寺以外は三里山西麓の記事であり近世末期に西麓を取材したもの

を書き留めたように思う。

3 武生市史 社寺の由緒 p.170 明治32年長福寺蔵

4 石川県の地名 手取村 p.296

5 今立郡神社誌 p.166-168

6 郷土史北新庄 富坂紅葉著 昭和三十五年発行 p.171

7 鯖江藩寺社改牒 p.97

8 新訂越前国名蹟考 p.246

ただし名蹟考成立の文化十二年(1815)と

寺社改牒の成立の享保六年(1721)では後

先に疑念がある。この点は今後の課題としたい。

9 鯖江藩寺社改牒 p.83

10 同前 p.84

11 因みに尾根参道と長床台地中央に向かう参道の

交点から、正西位にあたる支尾根の標高100mから

180mにかけての緩斜面の尾根は幅5mほどの

平坦な坂地が1kmほど続いている。人為的なもの

かどうか判別できなかった。参考までに付記

しておく。

12 越前若狭地誌叢書 上 p.181

13 木札 大瀧児権現氏子村内 大瀧神社宝物殿所

蔵 三里山西麓南麓は檜尾戸谷長尾新庄三ツ屋

北村矢船矢放上宮谷下宮谷徳間志間金屋真柄清

水頭五分市池泉野大坪木留石上文室口町余川片

山境谷北小山吉村南小山馬場、東麓は(五箇、

月尾谷省略) 山西西庄境戸ノ口野岡栗田部とあ

る。

池田 三里山を取りまく泰澄開創社寺について(上)

若越郷土研究 五十一巻二号

- 14 鯖江藩寺社改牒 p.51
 15 福井県史資料編2 p.149

3・3 三十八社（越前市国中町）

越前市国中町には国中神社の元社地として山麓に広大な三十八社遺跡が存在する。三十八社を論じる前にまず国中神社を追求しておきたい。延喜式神明帳の今立郡には「国中神社二座」とある。座とは社ではなく柱を意味する。ところが国中社は南中津山と北中津山と二社に分かれて現存する。どのように解釈すべきか、これを探ってみたい。「越前国名蹟考」¹には

北中津山村
 国中大明神社 北中津山ノ南ニ国中大明神有。此所御国四方真中之由。郷名中山。今云中津山。延喜式云国中ノ神社此処也。祭神二座未詳。（中略）

南中津山村
 法華宗 妙永寺
 とある。「鯖江藩寺社改牒」²には
 北中津山村

一 国中大明神 木坐像 長三尺七寸 氏子持
 脇立神躰拾七体有之候得共訳不知
 宮 式間四面
 社地七畝歩 村除地 但 南中津山村
 共二当社氏子ニテ御座候

（中略）

南中津山村
 妙円寺（中略）

一 白山宮 立木像 長三尺 壱丈四面 氏子持
 社地三畝二十歩 村除
 神事三月二日

一 松葉権現宮 立木像 長五寸 氏子持
 社地四畝拾歩
 神事三月二十五日

同村 浄土真宗西本願寺末 道場 義潭

とあり、元は中津山村と一村だったが、近世になって領主が北と南で分かれたことを機に分村した。分村後も国中社は一社だけだったようである。ところが『越前志』³には

一 中津山古へ別当の筋目□□□□□弟
 の□□□□□二宮支配を譲る此前二北
 と南と出入北は宮本ニテ勝夫より南
 は少しもかまわず友見二行二間半横

二間の堂より外二何もなし。

とあり、著者の坂野二蔵が寛政年間に見聞きした事柄を記している。どうも北と南で訴訟となり、南に国中神を分けたともうけとれる。そして『南中山村誌』⁴には「明治初年まで国中神社は浄光寺付近にあり」とあって、明治初年までは国中神社が南中津山にあったとされる。よって近世末に国中神が分祀されたと考えられる。しかしこのことをもって近世以前に当地に国中神が祀られていないとの論拠にはならない。以下に記す伝承や遺跡などを慎重に検討してゆかねばならないと思う。「神社誌」の記述をみておきたい

今立郡南中山村南中津山区

郷社 国中神社

祭神 越国霊彦神、天照皇大神

由緒 当社は越前の中央にあり越の中山と称し和名抄に中ツ山の郷と見えたり祭神は越国の御霊彦姫の二柱を祭り延喜式に国中神社二座とあり然るに往古より上宮下宮を分け祀り則ち当社は上宮の一座なり往古は当村字中山と称する山上に鎮座あり天正年中兵乱の砌壯麗なる大社は

廢絶しその後字中山の麓に鎮座せり旧跡は漸く耕地の字名に存するのみ。

口碑伝説 当社は越前国惣神分にも今立郡従一位国中大明神と記載せられ往昔中山上に鎮座の際は七堂伽藍を具備し奉仕の社僧も亦少からず数箇の坊舎あり就中別当正官坊は禁裏より代々法印の位を賜はりたりしに天正中兵乱の爲め悉く焼失せり然れども其遺跡は今尚ほ歴然として存し境内には法印の吊魂塔あり現に地字正官坊と称する広袤二町二反歩はその旧趾にして同坊に授けられたる御朱印地なり。(中略) 其他付近に瓜割清水七岩七清水等あるは古昔の御手洗所なりしと伝ふ。

今立郡南中山村北中津山区。

郷社 国中神社

祭神 未詳一説に越比古神、越比咩神彦火火出見尊(西庄境区村社の祭神を合祀)

由緒 (前略) 往昔より国司郡幸信仰し神地を寄付し社頭七十町に余り当郡第一の社なりしが延元天正数度の兵燹に罹り社殿撰末社に至る迄殆ど回祿に罹り旧社

池田 三里山を取りまく泰澄開創社寺について(上)

地は字三十八社と唱へて今に礎石を存せり但し本宮のみは災厄を免れしを以て神像を始め千有余年を経たる古物等現存して往時の盛を語れり斯くの如く古来連綿たる式内の正社にて中山郷十余箇村の総社氏神と崇敬し(後略)

口碑伝説 当社の付近字三十八社と称する一地域はこれ旧社地にして元拜殿の所在地なり昔時仏教盛なる頃僧泰澄堂塔伽藍を此地に建築し撰末社と称する堂社三十八あり故に此名あり正門大門は北中津山村の中央を貫き一直線の大路庄境に達し中山郷十余村即ち川島新堂落井松成赤坂両庄境山室野岡両中津山を氏子とし傍には別当宗匠院を始め数箇の社坊あり(中略) 現在字三十八社には山門鳥居其他の礎石あり又村内には大門立別当四屋敷神田斎田御福田机田御油田五月田九月田霜月田等の地字名を存せり而して別当職たりし宗匠院は其後新堂村に移転し(後略)

要約すれば、南中津山(中津山町)の国中神社は中山山上に鎮座しており、これを上宮

と称し、別当は正官坊であった。後に泰澄は北中津山(国中町)の山麓に堂塔を建立し、三十八社あった。これを下宮と称す。その別当は宗匠院であった記す。以上を踏まえて上社と下社を個別に検討してみたいと思う。

南中津山の国中神社(上社) 上社の所在の可能性及びその所在地を探ってみたいと思う。元の社地については『神社誌』に「往昔中山山上に鎮座の際は七堂伽藍を具備し」とある。中山とは地籍図によれば行司ヶ嶽山頂より北方に延びる峰(標高260m)を指すらしい。また社地について『南中山村誌』には

獅子堂跡

明治初年まで国中神社は淨光寺付近にあり。その際は獅子堂と称ふる小堂白崎清左衛門寿碑付近にありたり。(後略)

法印の墓

国中神社境内にあり。神社の元淨光寺付近にありし頃は法印祭と称し頗るにぎやかなる祭ありし由なり。神社移転と共にこの墓も現地に移されたるなり。(中略) 別当職正官坊は禁裏より代々法印の位を賜りたるものにして、この墓は法印の靈

を吊ふものなりと。現在字大久保谷と言へる谷は往古より地券前迄大門と言ひし所にして、字正官坊と称せられし同坊の御朱印地もありたるも（後略）

とある。山田秀雄氏によれば、当地に次のような伝承があるという。「69字峰ヶ谷の山裾には国中神社の元地と称する場所があり、その南方には溜池がある。その南面には共有地となつてゐる小さな区画があり、元参道だつたとはいへる。その地より少し下がつた場所は通称ババコと呼ばれ馬洗い場であつたと聞いている。」

その元の宮地と言われる場所を踏査してみた。そこは南東位に面して段が切れ、上段はほぼ奥行き17m、幅40m、下段は奥行き30m、幅40mの開削平地がある。その段は中山と称する山（行司ヶ嶽の北方の峰）の山頂を向いておりほぼ南東位にあたる。参道と呼ばれた地はその前面に当たる。その辺りには五輪塔も散見される。

中山山を調査してみた。標高260mの山上には山上部の北側を残して奥行き6m、巾10mに切り開かれ、さらに南方に隣接して奥行

き10m、巾5m程度の敷地が切り開かれてゐる。正南位をとる社殿跡とみられる。「七堂伽藍」とは神社誌特有の誇大表現であるが、確かに社殿は存在していたようだ。ただし山上遺跡がいつの時代のものであるかについては発掘調査を待たないと断言できない。因みに行司ヶ嶽はコニーデ型の秀麗であるが、その峰続きとなつてゐる中山もまた半コニーデ型で信仰の対象となるにふさわしいと考えられる。よつて元の宮地と称する跡地は中山の遥拝地と考えられる。

元の宮地についてさらに検討を加えておきたい。この地は『寺社改牒』に記す「白山社の三畝」あるいは「松葉社の四畝」の所在地でもあつた可能性もある。しかし松葉社については『南中山村誌』に

松葉神社

国中神社拜殿西北の所に一小祠あり。之元の境内神社松葉神社にして、往古は南中津山村ヶ谷（俗にムジナ山）付近、用水池の付近にありたりと言ふ。妙弓寺開祖高月院松葉日翠律師の守本尊なりと伝ふ。幾変遷神社併合の際国中神社に合祀

さる。

堂

国中神社内元松葉神社堂宇の上にある。小祠にして破損甚だしく今に潰滅せんとしつゝあり。俗にカンドウ様と呼ぶ。古老の言によれば同じく一つの神社なりしも、国中神社に合祀したりものなり。

とあり、松葉社は天正後にこの地に入つた妙弓寺の開創のものであつた。よつて松葉社も天正以降の所産であり、何らかの跡地に設立されたものであろう。また当地には獅子堂、カンドウ様などがあつたという。白山社については手掛かりが無い。

一方、浄光寺については元時宗で坂井郡長崎にあり、蓮如に帰依し真宗に改宗したが、天正年間に焼失し、その後当地に移住してきたという。『寺社改牒』にも道場と記載されている。よつて浄光寺は天正の頃に当地に転入してきたのであり、何らかの跡地に入つたと考えられよう。いずれにしても元の宮地及び浄光寺跡地ともども天正以前の何らかの跡地であつたと考えられる。

また6字堂の下は文字通り仏教施設の下で

あり、そこは数十段に段が切られている。よって大門あるいは前述の堂の下は神宮寺跡に関連する伝承あるいは地名とも考えられ、前述の旧社地を神宮寺跡とすることは場所的に妥当ではない。未知の堂跡があるのかも知れない。これほどの広大な跡地があり、正官坊等の伝承や遺物からみて上社の所在を否定し得ない。いずれにしても上社についてはさらに解明されるべき課題である。

また『南中山村誌』¹⁰には「大久保谷の奥に入れば、現在杉林となり居るも地形稍平坦にして多くの段あり。地を均して百歩ばかりの所あり。この地を比丘尼屋敷と言ふ」など関連施設の名残もある。

以上検討の結果、元の宮地と称する場所は白山社のものか、上社のものかはつきりしない。加えて上社及びその神宮寺が存在したかどうか不明と言わざるを得ない。

一方、仮に上社が存在したとすれば、国中神二座と二社の問題が残ることになる。つまり延喜式神名帳で敦賀郡の氣比神社七座とは社数を示すものではなく、祭神七柱をあらわしている。よって国中神社二座とは祭神越比

池田 三里山を取りまく泰澄開創社寺について(上)

古神、越比咩神の二柱を祀る神社を表しているようだ。では何故二社であるのか。この点を他の例を参考にしながら探してみたい。ただし国中社は越比古神、越比咩神を祀っており、本来ならば一宮に与るべき国つ神である。しかし一宮に値するほど遇されているとはみられず、しかも祭神に関しては明治期成立の神社台帳より古い記録等も見当たらない。¹¹『神社誌』の北中津山の国中神社では「祭神 未詳。一説に越比古神、越比咩神」と遠慮気味に記されている。こうした点から越比古神、越比咩神はいぶかしいとみる向きもある。こうした点も一応抑えておきつつも、若狭の事例をみておきたい。つまり若狭では若狭彦、若狭姫を祭神としており、祀られかたをみておくことは、国中神を検討するには参考になると思う。延喜式では「若狭比古神社 二座明神大」とあつて、かつては若狭彦姫の二座であつたが、養老五年になつて若狭姫のみが遷座されたと言う。若狭彦神社を上社と呼び若狭一宮、若狭姫神社を下社と呼び若狭二宮となつた。そしてそれぞれに神宮寺が所在した。国中神社の場合も若狭彦姫神社の事

例にならつて思う。逆の見方をすれば神社誌は若狭の例を雛形にしたともいえる。

三十八社 下社についてみてゆきたい。

永林寺 今立郡北中山村大字新堂¹²

本寺院ハ創立八百有余年ニ及び御墳山宗匠院ト号シモト真言宗ニ属シ中津山国中神社別当タリ然ルニ康正元年川島地籍鳥越ニ移転堂宇ヲ新築ス新堂ノ名称茲ニ起ル(後略)

長宝寺 今立郡南中津山村北中津山

当寺ハモト三里山東側山麓(現在地名三十八社)ニアリテ真言宗ニ属セリ織田信

長ノ兵燹ニ遭ヒテ社寺共ニ焼失(後略)

とあつて『神社誌』の大意と概ね合致している。また三十八社は真言宗に属したという。

また『南中山村誌』¹³には

三十八社跡

現在その残れるものなしと雖も、往古は七堂伽藍整備して居たりしと伝え、大門鳥居の礎石等残りしも区内道路改修のため他に移さる。現在の国中神社の位置にその頃より一神社あり、荒神にして女子

は参詣することを得ざりしなり。三十八社兵火にかかりたるを以つて、神体等は現在の国中神社に移したりと伝う。

墓¹⁴

俗に言うタテブリなる共同墓地中に墓石の破片あり。

とあつて、五輪塔の笠や宝篋印塔の笠の図を載せている。

現地を踏査すれば、宅地となつてゐる65字三十八社の上方の山麓一帯は奥行約100m、横幅約400mほどの広大な広さで、概ね東南方位に段がきられた緩斜面地である。また当地からはほぼ南位に中山山頂を望む位置でもある。現在はその一部は墓地として利用されているが、石積の居館跡らしきものや五輪塔、宝篋印塔がそこかしこに散見される。なお現社地は当域より東南方のやや離れた斜面を切り開いて造成されており、近世の創建か敷地拡大造成があつたと考えられ、村誌で記すように現社地は国中神の元社地ではないようだ。

また『南中山村誌』¹⁵には

墓

長宝寺裏俗に言うたいまつ山の中腹に古き墓石の並べるあり。これ上山六兵衛の墓地なり。このあたりの杉林往古畑若くは宅地の如し。この谷を大谷と言う。見延清右衛門、白崎三兵衛等戸と共に上山六兵衛も草分け七軒と教えられる家柄なりと言う。

と記し、五輪塔の笠、宝篋印塔の笠、宝塔の相輪、卵塔、等が並べて図示され、林中に散見された墓石図を載せている。よつて三十八社には神宮寺の関連寺院が取りまいていたようだ。

以上みてきたように三十八社跡は古代北陸道の裏街道の脇に立地し、延喜式内社の国中神社の神宮寺として創建されたようだ。そして当地は中山山頂をほぼ南位となる位置に立地している。またこの神宮寺は真言宗に属していたようであり、三里山西麓にある中新庄高源寺、長尾長福寺、戸谷大円寺の天台系大瀧寺に属する寺院とは主尾根筋を境として分けあつてゐるようだ。

では大規模の神宮寺三十八社はどのように成立し繁栄し衰退していったのであろうか。

この点を考察してみたと思う。『武生盆地の歴史1』¹⁶によれば当地に官衙が所在したとしており、今立郡が丹生郡より分離した以降に郡衙がこのあたりに置かれた可能性がある。その論拠として①国中遺跡から郡衙らしき建物が発掘されたこと。②貞観八年には生江氏緒が今立郡の大領であつた足羽郡の豪族生江氏が今立郡に進出してきている。以上を挙げている。つまり新たに当地に郡衙を建て、郡衙の力を強固に作り上げるために足羽郡での実力者生江氏に協力を依頼したのだと推測している。と言うことになれば三十八社の外護者は生江氏ということになる。

つまり弘仁十四年に丹生郡を分けて今立郡が創設され、国中の地に郡衙が置かれた以降、三十八社は郡衙機構の一環として神宮寺として創立され、生江氏がその外護者であつたと考えられる。但し『今立郡神社誌』¹⁷の下新庄の剣神社の項では、生江氏緒が剣社を外護したと記している。参考までに付記しておく。

また中世には今立郡は今南西、今南東、今北東、今北西の四郡に分かれるが、『慶長絵

図』¹⁸によればこの地を基点としているよう
だ。どうも郡衙の創設から四分法分郡が行わ
れた中世に入るまでは郡衙機能を背景として
栄え産業が活発化し居住区域が拡大された
が、四分分郡により郡衙が分散されるに伴い
衰退していったとも考えられる。

文化財面については北中津山国中神社には
口碑伝説 天正年中の兵乱に堂塔伽藍社
坊を始め旧記宝物に至る迄総て火災に罹
り烏有に帰せり然れども御本宮のみは此
地を距てたれば災厄を免がれたるに依り
罹災堂社の御神躰は之を奉還合祀したり
と伝

また『南中山村誌』²⁰には

書上書

今立郡北中津山村

一 国中大明神宮 壹社 但式間壹尺参間

御本尊 大明神 御長 壹尺五寸 但座像

泰澄作

脇主 拾七体有之候へ共訳不知

神躰 式拾壹体 是ハ古神ニ御座候

三門 石据 式間参間

鳥居 石堀 参間

池田 三里山を取りまく泰澄開創社寺について(上)

宮地 壹段式畝拾壹歩 但除地

酒井修理太夫様領分卜立会

祭礼 参月拾壹日 北中津山村南中津山

八月拾壹日 村共二氏子ニ御座候

(中略)

右ノ通り相違御座無候 以上

享保六丑拾月日

とある。このことを裏付けるかのように、当
社には秘仏が少なからず実在するとも洩れ聞
こえる。幸い三十八社の旧蹟は手付かずのま
ま遺存する。両者がきつちり解明される時を
待ちたい。

1 新訂越前国名蹟考 p.266

2 鯖江藩寺社改牒 p.32、34

3 越前志 坂野二藏著 越前市中央図書館蔵 庭
本文庫、国中神社の項。福井大学付属図書館蔵

高橋複写本では「讓る」が「謀る」とある。筆
者は前後の文脈からみて「謀る」をとる。

4 南中山村誌 稻倉憲澄著 昭和十二年発行 p

185

5 今立郡神社誌 p.75

6 同前 p.67

7 南中山村誌 稻倉憲澄著 昭和十二年発行 p

185

8 越前市中津山町七ノ六 山田秀雄氏

9 南中山村誌 p.185

10 同前 p.186

11 神名の初出は増補南越温故録(越前市中央図書
館蔵庭本文庫)で、越比古越比咩と記している。
著者は不明である。ただし内容からみて明治初
期の著作と考えられる。

12 今立郡寺院台帳 福井県立図書館蔵

13 南中山村誌 p.182

14 同前 p.182・183

15 同前 p.183・184

16 武生盆地の歴史1 真柄甚松著 p.70、72

17 今立郡神社誌 p.61

18 越前若狭地誌叢書 上 越前国絵図 p.16、19

今南東郡の北端は中津山村・月尾郷、西端は金
屋村、今南西郡の北端は新庄村、東端は清水頭
村、今北東郡の山西側南端は中野村で、山東側
南端は長谷村・水間村・新堂村・赤坂村・朽飯
村・庄塚村である。

なお今北西郡は当初は存在した模様だが後に今
北東に併合されたようだ。

19 今立郡神社誌 p.72

20 南中山村誌 p.208

3・4 粟田部地区の社寺

泰澄開創社寺について粟田部地区全般を概観しておきたい。『粟田部警防史』¹⁾には

養老年間には「泰澄大師来錫して粟生寺、千福寺、佐山寺等を開基し、大師の大徳は村民の信仰をあつめたり」と旧記にあり。

とある。しかし当地域は社寺数が多い上に伝承が錯綜しており、真実を探り当てるのは至難の事である。しかしながら筆者のみる限り『郷土史往来』²⁾がよく纏っているので、その要約を記しておきたい。

①千福寺(火打ヶ端↓鹿の浦↓上谷町西山)

薬師堂別当寺(泰澄開基) 天正中兵乱に

より焼失 後佐山寺と合併 山の寺 佐山

寺の旧地へ移転、臨済宗福井東光寺末、現

号泉福寺

②佐山神社(正一位佐山大明神 佐山媛)

(鹿の浦 嘉永年間水海部子山神社として遷座)

中世 鹿の浦神明宮

佐山神社別当寺 佐山寺(山の寺) 千福寺

泉福寺併合)

別当寺 成願寺(天台宗正応三年まで。鹿

の浦から団子田に移転、永仁二年岩本移転 時宗改宗)

③天神社 佐山天神(少彦名命 男大迹王勸請)

天神社別当寺 莊嚴寺(真言宗正言寺、元花筐校裏)後に真宗出雲路派改宗善畝寺(善休寺、善久寺とも記す)

④岡太三神↓白山三社権現↓明治維新後岡太神社

岡太神別当寺 栗生寺(泰澄開基)

天台真盛宗改宗(長享年間)

まとめると泰澄開基の薬師堂千福寺は元火

打ヶ端(小山村山尻)にあり、鹿の浦、上山

町西山と転々したと言う。『粟田部之図』⁷⁾で

は谷立町に薬師堂千福寺と記載され、その前

面には西清水が描かれている。佐山神社は佐

山媛を祀っており、元鹿の浦にあり中世は鹿

の浦神明宮とも称されたが嘉永年間に池田水

海に遷座されてしまった。その別当寺が佐山

寺であるが、泰澄開基では無いようだ。佐山

天神は男大迹王勸請で少彦名命を祀ってい

る。その別当寺は真言宗正言寺で元花筐校裏

にあったという。次は問題の岡太神社である

が、当初は岡太三神を祭っていたが、白山三社権現となり、明治になって式内社岡太神社に戻したと言う。その別当寺は栗生寺で泰澄開基である。この岡太神社については石山神の項で検討してみたい。

なお当地は市街地でもあり、大掛かりな開発が進められており、フィールド調査は成果が得られそうも無く見合わせることにした。

なお『郷土史往来』の記述を紹介しておく。

三福寺

了慶寺当地旧事記には「火打ヶ端。此処

に家数四十軒ばかりありて、市も此処に

立てり。また万福寺という寺此処にあ

り。千福寺、百福寺はすでにその跡と云

ひ伝えくわしくは万福寺含砂にありしと

云ふのみにて、その跡説つたはらず。」

(中略)味真野村小山区の山端が火打ヶ

端である。

『南越温故集』に

粟田部佐山寺、臨済宗なり、大迹皇子の

皇女佐山姫の座せし跡也となり、皇居の

跡、又王の水などと云流あり、往古は山の寺と号し来よし也、中古より福井東光寺末たり此処北の方、谷と云処薬師堂あり、別当千福寺と云て、年久しく霊地、境内より40年に及ぶ石碑を掘り出す、此寺号を山の寺用いて建立したるゆえ、今泉福寺と云う。

石山神について ここに筆者が長年探しあぐねた一つの問題がある。『越前国神名帳』¹⁰の今立郡の筆頭に「正一位石山大明神」とあるが、その消息が掴めないこと。『延喜式神名帳』には「須波阿須疑神社三座」とあるが、前者には須波阿須疑神の記載が無く、後者には石山神の記載がない。この問題に触れておきたい。

『越前国神名帳』は神名を記載しているが、石山神は中央の神名では無く、当地の地名が冠されていると考えられる。石山神の候補地として

①越前市粟田部102字石山

当地は岡太神社の上方の山地であり、泰澄修行地との伝承を有する岩清水が存在する。

②鯖江市新町11字石山

池田 三里山を取りまく泰澄開創社寺について(上)

当地は石切り場であり、大正三年に石材採集開始準備中の上土除去作業中に銅鐸が発見されている。銅鐸出土地近傍に古社がある例が多い。

③越前市松尾谷36字岩山

石山はイワヤマと訓ずるのかもしれない。当地の近傍は継体天皇の松隈皇子の伝承地でもある。また越前国神名帳今立郡の第二位に「正一位剣東院羽咋村岡大明神」と記されている。そして近傍の社寺には泰澄の院号「剣東院」を冠したとの由緒を有しており、石山大明神の候補地としては可能性が低いのではなからうか。

ここで前述した粟田部岡太神社に関して、再考してみたいと思う。『越前名蹟考』¹¹には

粟田部村 白山社

祭神 伊弉册尊、菊理媛命、大己貴命。

鎮守神国狭槌尊 但当時無之。

縁記伝、継体天皇当国に在せし時祭らせ給ふ。その後社頭荒廢に及びけるに養老三年泰澄大師再興あり。

『郷土史往来』¹²には伝承として

男大迹王が岡太王宮に在って、治水開拓

の大事業の完成を祈って三里山行事ヶ岳の頂上字扇ヶ平オスワ屋敷に国造りの祖神、国狭槌命、大国主命、建角命の三神を勧請し、同時に佐山の地に国土経営、産業開拓の祖神、少彦名命を勧請された。

また『神社誌』¹³には

県社 岡太神社

祭神 建角身命、国狭槌尊、大己貴命

境内神社 須波阿須疑神社

祭神 建御名方神、大己貴命、事代主命

由緒 不詳

白山比咩神社

祭神 伊弉諾尊、伊弉册尊

つまり明治になって白山三社から社名が式内社岡太神社に変更された。文献ならびに伝承があったとは云いがたい。また祭神は白山三社の祭神の伊弉册尊、菊理媛命に変え、オスワ屋敷の建角身命、国狭槌尊、大己貴命の本来の祭神に戻したというが、式内社岡太神社の変更はかなりの無理があったとみられる。延喜式神名帳の岡太神社は一座であり、越前国神名帳では正五位岡田神とのみある。

よつて座数が違っている点からみても、式内岡太神への改称は妥当ではない。次に須波阿須疑に注目してみると『南越温故録』¹⁴には

玉穂社白山宮

味間野五富庄粟田部にあり。(中略)撰

奥ノ御宮延喜式内の社あり。式内須波阿須

疑神社 大國主命、武御名主命、事代主命、

諏訪大明神祭る。

古歌に

越に來て行司ヶ嶽を詠れば禁に咲て角力

取の花

八隅知る遠ふの帝の跡留て今も佐賀ゆく

あはたべの里

とあつて『今立郡神社誌』と『南越温故録』

で須波阿須疑の祭神は一致している。よつて

粟田部の須波阿須疑の祭神は『神社誌』の創

作ではないようだ。また『越前地名考』¹⁵に「須

波阿須疑神社 粟田部須波阿須疑神社あり、

或是乎。友案、未審」とある。どうも当社は

須波阿須疑神を重要視していたとみられる。

そして『越前国内神明帳考証』¹⁶には

今立郡五十八前総神分

正一位石山大明神 式外也

按延喜神名帳今立郡十四座中須波阿須疑神社三座国内神明帳不載之、若石山大明神乎。

とある。以上をヒントとして「式内須波阿須疑三座は男大迹王が勧請した行司ヶ嶽山上のオスワ屋敷の地にあつたが、荒廃したので澄清の後代が再興し、地名の石山を冠して国内神名帳にある正一位石山大明神とし、後白山三社権現と改称して近世まで続いた」との案を試考してみた。しかし当案では石山神の再興時期が遅くなりすぎる。どうも明治になって岡太神への変更時に須波阿須疑神にすげ替えられたことに幻惑されてしまったようだ。

次に須波阿須疑神を排して、「石山神の泰澄開基、白山三社改称説」を提示しておきたい。論拠としては①字石山には泰澄の修行地との伝承地、岩清水がある。(ただし近年福井石として切り出された結果、昔の面影が消えうせてしまった。)②越前国神明帳では高い位階を受けながら、延喜式内社に挙げられていない神は泰澄系に多い。つまり石山神は泰澄系である可能性が高い。なお国内神名帳に正一位石山大明神に三座と無い点について

は、従一位国中大明神も二座とは記していない。こう考えれば三座でも無理がないと思われる。③当宮の神主千日家には大永三年の隆算補任状が伝来している。郡内唯一の権威の名残かもしれない。

なお『越前国名蹟考』¹⁹には秋葉社所在の山を足羽嶽とある。何故、足羽嶽が当地にあるのか。この点も含め今後の課題としたい。なお池田町稻荷の須波阿須疑神社について、坂野二蔵は『越前古名考』²⁰の中で手厳しくその非を論断している。

永平寺四世義演閑居の報恩寺 本題から外れるが、永平寺第四世義演が晩年永平寺退去後、報恩寺で余生を送ったとされる報恩寺についてみておきたい。『延宝伝灯録』²¹には

越州報恩寺義演和尚。得法以後、閑居報恩、卒不興世接、畫餅傷日、甘辛苦濕不関舌、王饌畫成何息飢、誌客未冷風月味、數経便路拾於道、正和三年十月二十六日寂

また『日本洞上聯灯録』²²にも

越前州永平義演禪師。未詳其本貫、受業於波着寺懷艦、毎以生死自策励、艦見其

精勤甚鍾愛之、仁治二年艦携師謁、永平元禪師、乃執弟子礼、蒙示捷徑有所警發、元滅後參孤雲、雲以本分針鍾重加煅煉、疑團爆然頓落、及永平虛席、逼衆請進院開堂、為孤雲之嗣、統衆嚴整法席孔熾、晚年閑居報恩、不復興世接、正和三年十月二十六日敕化、提唱不存。

とある。永平寺第四世義演が晩年退去後、報恩寺で余生を送ったとされる。『永平寺史料全書禅籍編第2』²³では義演和尚頂相が二幅掲載され、その贊の題でも「報恩寺義演禪師伝」、「本山第四世報恩義演和尚影贊」とあるが、そのいずれもが享和の作であり前掲を参考に作成されていると考えられる。またこの報恩寺については永平寺側でも比定が出来ていない。

義演の正和三年¹³¹⁴示寂を手掛かりとして、検討を進めたいと思う。

白山禪定道報恩寺 報恩寺といえはまず、平泉寺から白山山頂を目指す越前禪定道にある報恩寺山が挙げられる。『越前惣神分』²⁴でも「大野郡正五位報恩寺山祭山王神」とあり、平安末期から鎌倉初期には存立していたもの

池田 三里山を取りまく泰澄開創社寺について(上)

と考えられる。『勝山市史』²⁵によれば16世紀の白山参詣の様子を描く「白山天嶺絵図」に劍宿・水呑宿・法音寺・伏拝などと寺社や堂、宿泊地が記載されている。近年調査²⁶がなされ、法音寺跡も確定できている。しかし果たしてこのような標高1200mもの高地の修験地が隠居地として選ばれたかどうか疑念が残る。ただし『永平寺史』²⁷によれば「義演はこの報恩寺閑居によって外界との接触を絶つた」、当時の永平寺の人心の荒廃ぶりを象徴している」と記している。よってこの報恩寺は義演閑居の報恩寺に該当しないとは言えない。

佐山法恩寺 次に佐山法恩寺をみておきたい。『東寺修造料足奉加人数注進状』²⁸では

三峰寺 十四人 壹貫六百元
佐山法恩寺 三人 壹貫五百文
大瀧寺 三拾人 参貫文
楞嚴寺 十人 壹貫文
吉水寺 五人 五百文
朽飯寺 七人 七百文

文安二年乙丑九月日

文安二年に粟田部の佐山の地に密教系法恩

寺が存在したことは明らかである。しかし義演の正和三年¹³¹⁴示寂から130年後のことであり、義演閑居の報恩寺に比定するには至らない。

しかし前述の通り、佐山は佐山神社別当佐山寺の所在地であり、近傍には泰澄開基の薬師堂別当寺の所在地もあり、白山三社権現もある。このように佐山は天台白山系の地盤であったように思われ、義演の師の波着寺懐艦の出自である天台白山系の縁故によるものと考えられる。なお放光寺の項で取り上げた大瀧の三田村氏は大竹掃部とも記されている。永平寺文書「靈供田目録」明応四年の言う永平寺本院と多福庵寄進者の大竹氏、大竹方とは三田村氏の先祖とも考えられる。義演閑居の報恩寺に関して、大瀧寺の有力者大竹氏が永平寺の旦那であれば、義演の老後地として粟田部佐山報恩寺に周旋したとすることも、あながち荒唐無稽とはいえないであろう。²⁹

佐山法恩寺の規模についてみておきたい。近傍の寺院の奉加人数と奉加額を記しておいたが、法恩寺は奉加人数こそ少ないが奉加額では三峰寺とほぼ同額を寄進しており、裕福な経営が出来ていたようだ。また大瀧寺とは

独立した寺院であつたようだ。

以上みてきたように佐山法恩寺は永平寺第
四世義演の余生を送つた報恩寺に最も有力な
説と考えられる。

次いで足羽郡報恩寺（福井市安保町）につ
いては『県史通史編中世』³⁰で

この地域は真言宗寺院であろうか極楽寺
が存在したらしく、日像はこの寺の住僧
頼尋を討論の後改宗させ、寺号を法音寺
に改めたという。現在の日蓮宗真門流報
恩寺である。法華宗改宗以前に確かに真
言あるいは天台の寺院が存在したこと
は、報恩寺周辺で出土した石塔によつて
知ることが出来る。石塔の表面には梵字
が掘り込まれ、裏面には弘安三年とい
う造立年が記されている。石塔は明らかに
密教系のもので少なくともこの時期には
密教系寺院の存在したことが何われよ
う。日像の越前入りは永仁二年の二十八
歳の時と伝えられており、石塔造立より
十四年後のことである。

例え寺号変更を日像との争論後との伝承の
信憑性を疑問視したとしても、日像の越前入

り年代からみて義演閑居の報恩寺に該当しな
いと考えられる。

次に南条郡報恩寺（善源院 越前市府中3
丁目）についてみておきたい。最も古い文献
資料としては『越前府中寺庵敷地注文写』³¹で
は

法音寺 寺段一畝二十五歩

（慶長三年）八月十八日 長東大蔵 判
とあり、慶長年間に存立し、当時、この法音
寺は総社近傍の地にあつたらしい。由緒は³²

報恩寺 南条郡武生町浪花

当寺八貞元年中慈恵大師開創ノ由中頃衰
微セシガ寛政年中随悟和尚中興セシヨリ
当住マテ二十一世今ニ連続ス
また『たけふの文化財』³⁴によれば

木造 地藏菩薩立像 一体 鎌倉時代作

木造 毘沙門天立像 一体 鎌倉時代作

十六善神図 一幅 鎌倉時代作

阿弥陀如来画像 一幅 室町時代初期

不動明王図 二幅 鎌倉時代作

を有している。これらの寺宝が伝来したとな
れば、有力な物証ともいえるが、同書の解説³⁵
には

当院本尊の阿弥陀如来坐像も平安時代後
期の制作と推定されるが、これらの三像
は制作年代の古さや出来映えの良さから
推定して当院草創に当たり、開山随悟和
尚がその出身地の近江辺りから移してき
たものでないかと想像される。

とある。府中は何回も兵禍にあつており、こ
れほど古い文化財が多く伝来したとは考えに
くい。よつて『武生の文化財』の論旨は説得
力があり、義演の正和三年示寂まで遡り得な
い。よつて府中法音寺も義演閑居の報恩寺に
該当しないと考えられる。

なお粟田部佐山法恩寺が府中法音寺へ移転
した可能性は文献的には否定できないが、仮
に移転したとすれば坂本安楽律院末に転じた
ことになるが、他の多くの天台宗寺院とは趣
を異にしており、なにか不自然さを感じる。
その他の報恩寺

なお粟田部には浄土宗法音寺がある。

『寺院台帳』³⁶では

法音寺 今立郡粟田部字船佐山

正覚寺末寺仏徳山法音寺、正保元甲寅年
六月十一日開基武生正覚寺第二十四代良

公上人ノ弟子ニテ万公上人ト申候

『郷土史往来』³⁷では

年番宿帳の筆頭は天正十七年のライシ宿、酒屋□右衛門、今の岡本町□□□郎右門家である。同家は朝倉滅亡の際からわが郷土に土着したと伝えられる旧家で、今の舟橋町法音寺は同家が創立したと伝えられる名家である。

とあり、前掲の報恩寺とは無関係のようだ。

また寺院台帳によれば、鯖江市杉本町にも報恩寺（本願寺派）があり、寛文四年の創立である。さらに坂井郡井江渡の法音寺（高田専修寺派）は延享二年の創立であり、ともに該当しないと考えられる。

- 1 粟田部警防史 飯田栄助編 昭和十五年発行
- 2 郷土史往来 栗塚勝治編 昭和56年発行
- 3 同前 p.180
- 4 同前 p.172
- 5 同前 p.16
- 6 同前 p.172
- 7 粟田部之図 文化七年写 高島氏蔵本 粟田部郷土史研究会 平成五年発行

- 8 前掲2に同じ p.179
- 9 越前若狭地誌叢書 上 南越温故集 p.545
- 10 国内神名帳の研究 資料編 三橋健著 越前国惣神分 p.245 越前国神名帳 p.263
- 11 新訂越前国名蹟考 杉原丈夫編 松見文庫 p.267-268
- 12 郷土史往来 p.20・p.126
- 13 今立郡神社誌 p.25
- 14 南越温故録 窪田本庭本雅夫写 越前市中央図書館蔵庭本文庫、越前若狭地誌叢書 上 南越温故集 補記 p.586
- 15 越前若狭地誌叢書 続巻 越前地名考 p.294
- 16 越前国内神明帳考証 森田良見著 明治三十一年 石川県立図書館森田文庫本 影写本
- 17 この案において延喜式の成立は延長五年(927)であるから、この当時、須波阿須疑は実在したはずであり、泰澄示寂は神護景雲元年(767)で160年前に死去していた訳で、伝承の云う泰澄再興は無理がある。ひとまず泰澄の後代が再興したとしておきたい。
- 18 越前若狭古文書選 豊原・平泉寺継目差定之写 p.285
- 19 新訂越前国名蹟考 p.693
- 20 越前若狭地誌叢書 続巻 越前古名考 p.263
- 21 大日本仏教全書 延宝伝灯録 第一 p.118
- 22 正元帥蜜著 延宝六年(1678)
- 23 大日本仏教全書 日本洞上聯灯録 p.221
- 24 嶺南秀怒編 享保十二年(1727)

23 永平寺史料全書 禅籍編第2 p.133-138

義演和尚頂相 享和元年(1801)玄透即中贊

24 国内神名帳の研究 資料編 三橋健著 越前国惣神分 p.252

25 勝山市史 第二巻 原始-近世 p.253

26 福井県歴史の道調査報告書 第5集 白山禅定道-越前禅定道-宝珍伸一郎著 p.103

27 永平寺史 上巻 p.263

28 福井県史 資料編2 中世 p.155

29 永平寺史 上巻 p.486

30 福井県史 通史編2 中世 p.1025

31 福井県史 資料編6 正願寺文書 越前府中寺庵敷地注文写 p.163

32 武生市史 資料編 社寺の由緒 p.295

33 加藤本「報恩寺正光院 比叡山延暦寺末号談義所北向引接寺大門」とあり、総社近傍にあったらしい。

34 南条郡寺院台帳 福井県立図書館所蔵本

35 たけふの文化財 p.17・22-23・71-72

36 同前 p.72

37 今立郡寺院台帳 福井県立図書館所蔵本

38 郷土史往来 p.270

4 三里山の特性

以上、三里山を取りまく社寺についてみてきたが、三里山の特性の上に成立・維持して

池田 三里山を取りまく泰澄開創社寺について(上)

きたことであろうと考えられる。

① 独立丘陵三里山の山麓周辺が低水位となり、河川が取り巻いており、内水運の便がよい。

② 国衙に近く、安定した広い耕地(丹南平野)の今立郡域の中央に位置する。

③ 国衙に近く、北陸道の裏街道となる陸上交通の要所であること。

④ 国衙に近く、鬼門の方位にあたること。

⑤ 国中神には越国彦媛の一宮クラスの神が祀られており、早くから開かれた文化水準が高い地域であった。

⑥ 今立郡の郡衙機構の設立によりさらに文化産業が発達したと考えられる。

⑦ 三里山は比較的低く、山麓周辺は内水運が発達し、安定した耕地の中央部にあり、寺僧や修験者には好適な山地であること。

⑧ 三里山西麓北麓一帯は低地であり、日野川東流や洪水の影響を受け、耕地開発が立ち遅れた地域であること。

5 泰澄開創社寺の草創とその後についての検討

泰澄開創由緒を有する代表的社寺をあげ

て、その草創とその後について検討したいと思う。

5・1 日野神について

三里山近傍の日野神は泰澄が創建した越前五山の一つであるが、河端五右衛門文書¹⁾では乍恐以書付御訴訟奉申上候

間部若狭守領分 越前国今立郡荒谷村 日野山北ノ宮別当曹洞宗文殊寺煩二付代 楞嚴寺 訴訟人 越山 黒印 (中略)

右訴訟人文殊寺煩二付、代楞嚴寺越山奉申上候、右文殊寺別当居候荒谷村日野三社権現社之儀ハ其昔継体安閑宣化之三皇を神祿崇祭三社権現と唱、数百年ヲ経本地垂迹之砌、文殊菩薩不動觀音之三尊を本地仏二成給ひ、同郡西尾村字平子村に奉安置、同郡味真野郷鎮守候処、養老二年午年頃泰澄大師荒谷村付日野山別名小健山鄙ヶ嶽へ右三社を奉勧請事を思ひ立給ひ終二日野山荒谷尾絶頂を開、三社権現を移し、別当ハ本尊文殊菩薩候迎、日野山文殊寺号守護仕来、(中略)猶又文殊寺三社別当二紛無是、詮ハ元西尾村字平子山鎮座ニ而、日野山勧請跡山を右村

へ抔山ニ為致(中略)(文化七年)午七月十八日

と記しており、近世文書ながら、泰澄の行動に関する伝承を残しており、興味深い。つまり泰澄は平子山(新宮山)²⁾にあった仏像を日野山山頂に移転したという。新宮山はこの付近の分水嶺となっており、味真郷と大屋郷の境界と考えられ、この仏像は本来は郷の堺神であったものと推測している。

久保氏は「長期継続・拡大型とでもいうべき山林寺院は在地の霊山、有名霊山を問わず数多くみられ、その分布傾向に大きな特徴が見出せる。一つは国府周辺に濃密に存在すること、二つには国境や郡境の近くに存在することである。越前五山のうちの文殊山は足羽郡・丹生郡境、日野山は旧丹生郡(今立郡含む)・敦賀郡境にある」と記している。あるいは前記伝承はこうした堺神の発生事例ではないだろうか。

そして山林寺院としては日野山北面山腹に大寺遺跡が遺存している。三里山の稚子権現堂遺跡や大瀧寺の奥の院ともども標高300m前後の山中にあり、規模的にも似通っている。

この日野権現は『日本紀略』によれば、延喜十年(910)従五位下明神社(神宮寺)の位階が授けられてはいるが、延長五年(927)成立の延喜式式内社には入っていない。他の泰澄系の社寺の多くが式内社からはずさされていることからみても、十世紀には国衙の意向として泰澄系の社寺を排除した様子が伺える。なお日野神は国内神名帳に今立郡の第五位に記され、従一位となっており、国中・大瀧・日野は同列であったようだ。

5・2 三十八社について

3・3項で三十八社について記したが、少し年代順に当地関連事績を整理してみよう。

① 中山郷に関する出土木簡 和銅⁷⁰三年

② 泰澄示寂 神護景雲^{76,77}元年

③ 丹生郡から今立郡分立 弘仁⁸³十四年

これ以降に郡衙設立

④ 生江氏今立郡大領 貞観^{86,87}八年

⑤ 三十八社(神宮寺)を創建

参考 日野神授階

延喜⁹¹⁰十年

参考 延喜式の成立

延長⁹²⁷五年

出土木簡によれば和銅年間には中山郷から

長屋主宅に貢進され、中山郷が安定した地域

で中央ともうまく行っていた様子が伺える。

こうした中で今立郡の分立が実施され、生江氏が入部する訳だが、少なからず既得権者との確執があつたことは想像に難くない。こうしたことが生江氏が大領となるのに時間を要した理由だつたように思う。また伝承では三十八社の創始者は泰澄としていますが、今立郡の分立以前のこととなり、筆者はこれを疑問視したい。日野神宮寺、延喜式の成立からみて十世紀初め頃を三十八社創立と考えたい。

式内社への搭載は前述のような郡衙への貢献度が左右したように思う。また国内神名帳では今立郡の第三位に搭載され、従一位となつており、その隆盛ぶりがしのばれる。

5・3 高源寺について

高源寺と国中社は主尾根を境にして東西に分けあつているが、主尾根の峰に祭祀遺跡があり、いずれもが高源寺に由来するといふ。

高源寺跡の所在地が国中社へ下る支尾根と主尾根の交点にあり、近距離にもかかわらず、国中神は当所への関心が薄かつたようだ。このことからみても高源寺がまず創建され、後代になつて三十八社が創建されたように考え

られる。そして後代になつて高源寺と国中社は主尾根を境にして東西に分けあいそれぞれの領分が確定していったように思う。

そもそも高源寺は南越平野のほぼ中央にあつて当地全体の豊穡を祈念して設立されたが、後に三十八社が創設され、設立の目的が変わつてしまつたように思う。つまり三里山西麓一帯は低地であり、しかも日野川の東流並びに洪水の被害を被る地域であり、条里制遺構が残っていないことからみても、開発が遅れた地域であつたと考えられる。地理的條件の悪さは郡衙や有力者にも魅力の乏しい地域と映つたようで、このことが寺を維持できなかった理由だつたように思う。そのため式内社成立の十世紀にあつて式内社・国内神名帳へ搭載されなかつたように思う。そして結果的には大瀧寺にその地位を奪われ、高源寺はその支院に甘んじたようだ。

なお三里山は国衙の鬼門方向にあたる。よつて高源寺の草創については国衙の設立とリンクしている可能性を指摘しておきたい。

5・4 大瀧寺について

大瀧寺奥の院の社殿は日野山山頂方位をと

池田 三里山を取りまく泰澄開創社寺について(上)

っているのみならず、後背は白山方位である。点を指摘しておきたい。さらに大瀧寺奥の院から越智山山頂を結ぶ線上に三里山の高源山祭祀跡が所在する。また三里山の稚子権現堂の長床建屋台地は高源寺跡を通じて大瀧寺の奥の院の方位をとっていることは先に挙げていたが、大瀧寺奥の院は行司ヶ嶽に視野を遮られている。これらのことは高度な測量技術を有しながら、各所を正確にポジショニングしたと考えられる。ともあれ大瀧神は日野山の霊力を受け、三里山の霊力を受け、且つ越智山の霊力を三里山が大瀧神へ導くように意図されたと考えられる。よって大瀧神は日野神や高源寺より後出とみられる。一方、式内社岡太神は地主神として十世紀に岡本の地に所在したと考えられるが、中世には大瀧神に押され消滅してしまつたようだ。ともあれ岡太神が十世紀に式内社に選ばれるからにはそれなりの規模で、それまでの貢献度が反映されたことであろう。しかしこの狭い区域で十世紀に岡太神と大瀧神が並立していたとは考えにくい。以上を鑑みて、十世紀以降に泰澄系の大瀧神が三里山から勧請されて山上に祀

られ、急拡大していったのではないだろうか。そして高源寺から大瀧寺へのシフトは山岳寺院としての地理的条件が良好で、経営条件がよいなどによって決定的なものになったのではあるまいか。しかし国内神名帳によれば大瀧寺は国中神・日野神と同じ従一位の位階を得ているが、式内社には選ばれなかつた。

6 後書き

当テーマは筆者が長い間暖めてきたものであるが、本来のテーマをはずれたものを加えたため冗長なものになってしまつた。ともあれ解明したとは云いがたいが、一つの区切りとして発表することとした。これを組上に載せ叩き台ともなれば幸甚である。取り上げた項は順不同であり、纏まったものから記述した。次稿は平谷寺（鯖江市中野町原）、蓮華寺（鯖江市川島町）、関泉寺（旧号大円寺・越前市戸谷町）等を予定している。最後に泰澄開創社寺マップの転載許諾を頂いた越前町教育委員会の堀大介氏、また中津山の旧社地を案内頂いた同町山田秀雄氏、さらに高源山山城跡と高源寺跡の下刈等の作業をして頂い

た北新庄地区自治振興会三里山調査整備事業検討委員会、以上の各位に謝意を申し上げる。また永平寺四世義演閑居の報恩寺については永平寺前傘松編集部長熊谷氏より課題の提示を戴いたことを付記しておく。

1 武生市史 資料編 諸家文書二 河端五右衛門文書 p151~156

2 越前市庄田町30字日羅古山（平子山）は新宮山に飛地として所在する。

3 第20回国民文化祭・ふくい2005 山と地域文化を考える 資料集 北陸の霊山―古代山林寺院の成立と中世への展開 久保智康著 p75~85

4 大瀧寺奥の院はN140°Wで日野山山頂を望む方位をとっており、大徳山山頂からの白山方位はN60°Eで、日野山と白山を眺望できる。このことは大瀧寺の創立状況を示唆しているように思う。ただし正確には白山と日野山を結ぶ直線は越前市柳元町の権現山と越前市中印町を通る。このことは別途検討したいと思う。なお白山は夏至の日出方位でもある。

5 大瀧寺の奥の院から三里山の高源山祭祀跡遺跡及び越智山山頂の方位はN⁶⁵°Wである。また概ね夏至の日入方位である点にも注意を払っていただきたい。

三里山周辺図

